

第 1 回国際化ワークショップ

セミナー

「地域からみた国際社会、
国際社会からみた地域」

講師 若月 章

(県立新潟女子短期大学 助教授)

日時 平成 10 年 10 月 22 日

場所 舞鶴市政記念館

こんにちは。ただいまご紹介にあずかりました県立新潟女子短期大学の若月と申します。今日は京都市から JR の山陰線に乗りまして、舞鶴に初めてやってきました。敦賀は 2 度ほど 1 泊 2 日なり、調査研究のために訪れたことがあるのですが、舞鶴は初めてです。本日はこのような機会を与您にいただきまして、本当に私といたしましても貴重な経験になっています。

さて前置きはこのくらいにしまして、今回、京都府、それから立命館大学の森功一先生から「地域からみた国際社会、国際社会からみた地域」について話をしたいというご依頼でした。そのポイントは何かという、日本海側を中心にしまして、それに限らず日本における国際化、国際交流の具体的な事例、紹介に徹してほしい。特にどういうきっかけで、あるいは何が要因になって交流事業が開始されたのかと、こういった事例をどんどん時間のあるかぎり話してほしいということでした。

まず、与えられた前段の時間を利用して、3 つの点をここで話したいと思います。1 つは地域主体の国際化の時代、あるいは地方の時代が到来してきたという話を簡単に整理をします。次に国際化への多様な取り組み、特に今回は、私が住んでいる新潟の国際交流の事例を、まずはご紹介しておきたいと思います。最後に、まとめということにもつながるのですが、私は今回ここに来たのは初めてなのですが、京都北部地域、ここはまた北近畿地域とも別に表現されるようですが、その地域の国際化への期待ということ、こういった流れで話を進めてまいりたいと思います。

まずは国際化の時代、地方の時代の到来ということ。さて、いったいいつごろからこの言葉が日本の中で叫ばれるようになってきたのか。大体 70 年代のよ



うに思います。高度成長期がちょうどピークにさしかかってきて、そろそろ都市、地方も含めてその成長のひずみというものが始めてきた。それを受けまして地方の時代を向かえるようになった。我が国もようやくそのあたりから地域への関心が高まってきたのは、ご存じのとおりです。これを反映して、それぞれの地域が地理的条件であるとか、あるいは自然的、歴史的な特性というものを生かしながら、全国でユニークなまちづくり、今回は市、町の方々が中心ですが、村おこし、こういったことが進められてきているように思います。

かつてどの地域におきましても所得水準であるとか、あるいは文化水準に認められてきているような地域格差の縮小ということを、地域社会の課題として掲げました。そして先進地域に何とか追いつかなければいけない。こういった努力が積み重ねられ続けてきているように思います。幸いにしてどうでしょうか。所得格差については、ある程度縮小されてきたと思います。現在はこの数日来、新聞にも載っていますように、いわば豊かさというものが新たな指標になっているようです。さらに最近では、地域格差というものもいいではないかということで、地域特性の一つのあり方として、東京であるとか、あるいは大阪といった、大都市圏にないような、頑固なまでに地方色を打ち出して、その特性というものを場合によっては国際社会、世界に向けて開いていこうとするような動きも始めているように思います。したがって地方の時代というのは、また国際化の時代でもあるわけです。こういう認識から、いろいろな国際交流というものをきっかけにして、国際的に評価されるようなユニークなまちづくりというものを進めようとする動きが、全国各地で見られるようになってきています。

従来までは、地域と地域の間に見られる力比べといいますが、主にハードの面だと思いますが、こういった時代が長い間続いてきたように思います。今はまさにそれを受けまして、地方相互のソフト、知恵比べが重要であるといった時代が始まってきていると思います。地域というものをじっくりそれぞれが見直して、地域独自の素材というものを発掘する。地域住民というものを巻き込みながら、その地域のパワーというものを未来に向かって生かし発信していく。そういったものを国際的に展開させようとする試みというものが出てきているわけです。

国際交流面でいいますと、かつては割合に親善交流から始まってきて、その典型的な事例ですが、姉妹都市交流、あるいは中国との関係からいえば、友好都市提携ということで、さまざまな往来が視察、調査、あるいは研修生の受け入れという形であらわれています。それから文化、スポーツ交流と、経済交流、あるいは最近ですと、国際協力、こういった取り組みが、現在着々とそれぞれの地域で具体化しているように思います。

それだけではなく、受け入れということですから、地元それぞれの地域のまちづくりというのものも、当然あわせて考えていかなければならない時代にさしかかってきたということです。いろいろなイベントが開かれています。いろいろな交流が全国各地で実際には行われています。この北近畿地域でも事前にいただいた資料を見ますと、多少の差はあっても、いろいろな交流が行われてきていることを知ることができたように思います。かつてのように東京とか、関西でいえば、大阪、京都以外の地方都市がイニシアチブを取って、いろいろなことができるようになりつつあります。かなりユニークな国際的イベントというものもあります。要するにこういった着想と能力というものが地方にも備わってきたのだということだと思います。舞鶴であれ、福知山であれ、いろいろな事例がおそらく展開されていると思います。国境を越えて地域どうしが、国、内外で交流を重ねることによって、相互に国際的な協調、連帯であるとか、あるいは何らかのかたちでの共有意識というものが高まってきている。ひいては地域の振興、あるいは国際平和に寄与するこういう時代がやってきているのだと思います。

今述べましたような地域社会の機運から、例えば国

ばかりには任せておけないということで、民際外交が盛り上がっています。これは地域におそらく根づいているであろうNGOの活動もその一つだと思います。先程、舞鶴市長からお話がありました、大変今国際社会は複雑化しています。そういう中で私たち一人ひとりが地域社会で生きているという自覚、そして私も新潟で生活している一人です。したがっていやおうなしに、国際社会と真正面から向きあっているわけです。1つの物差しだけで世界の中を推し量ることが難しくなっている時代でもあります。皆さんもぜひ、規格品ではない新しい物差し、ないしはいろいろなざん新な発想というものが求められているので、いろいろな趣向、考え、討論をここで活発に行っていたければありがたいと思います。地域レベルで国際交流を推進していく基本的な意義は何かと考えますと、世界に開かれた地域社会作りを推進し、その中で地域の活性化を図っていくということだと思います。

これからいろいろな事例を提供していきたいと思いますが、担い手はだれか。私は新潟でいろいろな社会活動にかかわっています。全国レベルのもの、国の関連のもの、県、市に関連するものなどいろいろあるのですが、担い手は大体4つのグループに分かれます。おそらくここに該当する人たちはそこに必ず入っていると思います。

まず1つは国を除外して考えるわけですが、市町村、あるいは都道府県です。2番目、国際親善交流に身近な人たちでかかわっている地元の人たち、これはNGOとも言います。それから開発問題、平和、人権、そういった運動の関係者やグループという人たちもいらっしやるでしょう。4番目に、今回も集まっていますが、学生、女性、それから案外一生懸命やっているシルバー層の人たちがいます。ここは今、過疎化とともに高齢化を向かえているということですが、新潟もそれに漏れません。長寿社会になっていることから高齢者の方々が頑張っています。この人たちが担い手になって、うまくいけばスクラムを組みながら国際交流が地域社会の中で展開していけるはず。これがある意味では理想の姿だと思います。

さて、次に国際化への多様な取り組みということで、今回は新潟の国際交流について、まず話をしておきたいと思います。特にここは市、町、村の方々がいらっしやることから、新潟県ではなく新潟市の国際交

流について話をいたします。新潟というのは、皆さんもご存じかと思いますが、確かに金沢と並ぶ日本海側の有数の都市です。むしろ金沢よりも2万~3万多いのです。まだ50万はいていません(今年1月、黒埼町との合併によって50万を超えた)。ただ5~6年前ですが、私も関係したNHKの全国番組でこういう表現がありました。つまり日本海側の最大の都市と言われながら、やはり「新潟というのは、全国的に見るならば単なる一地方都市にすぎない」と、私は新潟市についてはそのように思っています。そういった脈絡から、新潟市は皆さんの舞鶴市とは人口も規模も違う。それ以外の市町村の人たちも事例になるかどうか不安をお持ちだと思いますが、それはそれで事例になるのです。これはまたあとで詳しくお話ししたいと思います。そのような認識でお話を聞いてください。

まずこの話からいしましょう。皆さんはどのくらい新潟に行かれたことがあるでしょうか。あるいはイメージとして、新潟について何らかのお考えがあるでしょうか。さてどのようなイメージをお持ちでしょうか。時間がありませんのでこちらの方で申し上げます。新潟といいますと、大体トンネルを越えれば雪国だったということで、雪国、冬の生活といったイメージがあるかと思います。実は新潟市そのものはあまり雪が降らないのです。ただ山間部に行きますと3m、4mはざらです。そういった新潟一つとってもイメージの差というのがあります。

大体今まで私も習いましたが、中学校の社会科地理等の教科書で見ていると、雪国の生活というと、新潟市の事例はないのですが、しばしば十日町市があって、あるいは小千谷市、長岡市、あるいは六日町という町がその代表として必ず挙げられます。そして、そこでの雪国の生活というのが事例として描かれています。それが大体定番でした。ところが最近は違うのです。今回そのコピーを持ってきました。私の研究室にもありますが、中学生の社会科地理、副題が「世界と日本の国土」、昨年来から全国の中学校で社会科地理の教科書として使われているものです。これは実は新潟県の国際交流協会に私の友人が多数いまして、ある講演を行ったときに次のような紹介してくれたのです。「先生こんなものがあるのですよ」と。新潟県庁、面目躍如だと思いますが。

通常ですと先程お話ししましたように、雪国の生活

が実例としてたぶんあるのだろうと当然のように考えました。ところがこの中学校の教科書で使われていたのが、「国際化の進む日本海沿岸、活発化する国際交流」と、新潟県の進める環日本海交流を取り上げていまして、新潟県の国際交流が事例としてあって、かつてあったような雪国の暮らしという事例で新潟が挙がっていませんでした。目を輝かせて新潟県の職員が私に紹介してくれました。しかも2ページ割いているのです。全国のいろいろな地方の特徴の説明があるのですが、これと同じようなスタイルで説明されているのが福岡でした。福岡、あるいは九州地方を中心にした地域から見た国際社会のマップがあるのです。いろいろな時代のかつてからの歴史的なつながりも含めて書かれていて、沖縄の問題がある、あるいは福岡、九州というのは朝鮮半島や上海、中国に近いのだという説明で、アジアに開くのだという書き方がされていまして、それとともに新潟の国際交流の解説があったのです。

もう1つ付言するならば、多くの先生がこの教科書作成に参画されていますが、ここを担当した方々は、新潟と一切縁もゆかりもない方々が新潟のこの部分を説明しているのです。この辺はずいぶん新潟のイメージも変わったのだなと思いました。確かにそういった国際化の努力が新潟市、県あるいは新潟県、市のみならずあるわけです。これからそのような話を少ししておきたいと思います。とにかくこれだけ新潟は変わったのだということです。

まず取り上げるのは新潟市です。新潟市が取り組んでいる国際交流の基本姿勢、私もいくつかの審議会の委員になっているのですが、4つほどの説明がなされています。まず1つは地域の国際交流の核になるのが都市間交流です。世界のあらゆる国々の都市や市民と親善交流を深めていく。これを基本にしなごその姉妹友好都市交流というものを中心に、いろいろな都市間交流を展開していくという構え方です。2番目として主体は何か。市民だということ、つまり市民であって行政ではない。国際交流の主人公はあくまでも市民なのだというスタンスに立っています。3番目は理念です。ご存じのように舞鶴市もそうなのですが、「環日本海交流」、これが地理的な特性もあわせて、新潟の指針になっている。環日本海交流を軸にして世界へ国際交流を広げていこうという姿勢です。4番目に取り上

げられているのが、先程大森先生から説明がありました「うちなる国際化」、外国人の方々との共生です。つまり外国人も住みやすい快適なまちづくりをあわせて見つめていく。こういう以上4つのポイントが出てきています。

舞鶴市同様、新潟の国際交流は、実際には、やはり港とともに発展してきました。安政の通商条約によりまして、新潟港は全国の5つの港の開港場の一つに選定され、明治元年に開港されています。戦前、対岸との人、物、金等の交流があった。戦時中は満蒙開拓の人々の送り出し港であった。ある専門家の表現を借りるならば「軍事戦略拠点だった」という時代も一時ありました。戦後になりますと時代は変わって、特に冷戦時代の中で、着実に新しい発想の中で、環日本海対岸交流拠点都市として発展して今日に至っています。今日では誠に幸せなことですが、海外に向けて国際空港であるとか、あるいは国際港湾、高速道路も、磐越、北陸、関越自動車道が全国とつながるようになってきた。いくつかのシンクタンクも出来上がり、情報のネットワーク形成も着々と進められています。

ともかく新潟はまず何をもって、姉妹友好都市提携というところから、国際交流が戦後始まりました。日本で最初に姉妹都市提携が行われたのは1955年のことです。ご存じの方が多いと思いますが、長崎市とアメリカのセントポール市の提携がなされました。ちょうどそれから10年後ですから、1965年のことです。新潟が行ったのは冷戦時代真ただ中、アメリカと、そしてその当時のソビエトとの交流をまず同時に行いました。つまりバランスをとったのです。先行したのはソビエトのハバロフスクで、日本海の内側から国際交流を行っていきました。ただ市民の要望がありまして、アメリカの都市とも姉妹提携を結びたいということで、新潟市は探っていったようです。提携先はテキサス州のガルベストーンという港町です。それほど大きな町ではありません。

その当時新潟に、新潟アメリカ文化センターがありました。今はなくなっています。その館長さんの郷里がテキサス州ガルベストーン市であったということで、65年に提携がスムーズに進められてきました。提携以来、使節団交換を中心にしているいろいろな分野の市民交流、相互理解のための事業が進められてきています。ただしアメリカの場合は、多くの自治体がそうである



ように、いわばアメリカ式の典型的なフレンドシップ、つまり友好親善交流そういった視点があるかと思えます。

これはアメリカとの提携だけではないのですが、やはり国際交流をやっていきますと、様々な善意が寄せられます。それは何かというと、アメリカの場合をまず挙げてみますと、昭和39年のことですが、新潟地震がありました。そのときに新潟市というのは、都市が荒廃しかねないような壊滅的な打撃を受けたのです。そのときにガルベストーンから、それほど人数は多くないですが、特使が派遣されて、いろいろな支援というものが行われて、そういうところから更に、深いきずなが出来上がってきています。それから逆に、テキサス州南部というのは、天災、自然災害が多い土地柄です。それはハリケーン、台風です。ハリケーンでガルベストーンもよくやられるのです。そうすると今度は新潟市からいろいろな支援がなされていく。距離は遠いのですが、実に深いつながりが新潟との間で築かれています。

今、新潟の町にガルベストーン通りというのがありません。例えば町の中にジャズ喫茶があり、デキシードジャズをやっています。そして一般的なアメリカ料理ではなくて、南部の料理を提供してくれるレストランなどもありまして、ちょうどその一角に行きますと、アメリカのにおいがする。しかも南部の典型的なおいがるのです。よく新潟と言われますと環日本海交流と言われながら、そういった地域とも交流があるので。

それにあわせてロシア極東のハバロフスク市があげられます。1956年、日ソ共同宣言、つまり国交回復がなされて、それから盛んに対岸との間で貿易見本市が開かれ、新潟の地元の経済人が向こうに向いて

いった。それをきっかけにして、新潟市長がハバロフスク市を訪問し、そして最初はやはり文化交流から始まった。児童画であるとか、版画であるとか、そうした作品交換が始まったのですが、一気に姉妹都市提携に進んでいったということです。あの当時冷戦時代ですから、それこそ日本とモスクワ、ソビエトの間は大変な緊張関係にありました。それをおして、ハバロフスクとの間で何とか交流を進めていきました。この当時提携関係が唯一ありましたのは、ご当地舞鶴とナホトカの交流のみでした。おそらく都市提携はその次ぐらいのように思います。何とか舞鶴に負けまいということで、積極的に新潟の特性を生かしながら、交流を進めていきました。もちろん新潟地震のときにはハバロフスクからも援助がありました。

新潟のユニークなところというのは、これが私の専門とも絡んでくるのですが、地域間国際交流という点で言えば、ちょうど昭和45年以来始まった大きな動きがあります。これはかつてでいえば「日ソ沿岸市長会議」、今日で言えば「日露沿岸市長会議」というものの道筋を開いたということです。受け入れ先については先方は向こうはハバロフスク、こちらは新潟ということで、いわば国家相互の緊張関係を何とか地域どうしで解こうということです。国と国の間では、途絶えたりつながったりという関係がありましたが、みごと、市どうし、自治体どうしではつながっていったという動きがあります。

それからもう1つ、今度は中国東北部黒龍江省のハルビンです。今度は米ソならんで中国です。ちなみにこうした交流を当時やっているところは、日本でいいますと、全国の大きな都市、大阪、京都も含むのでしょうか、それ以外の地方では一切なかったのです。米中ソ関係を国際交流で日本が作っていった地方都市というのは、事例では非常に珍しかったのです。ターゲットはハルビンです。新潟というのは、古くから特に中国の東北部にある黒龍江省に縁のある人々が比較的多かったのです。これにはやはり戦前、戦中という不幸な大陸との、ある意味ではつながりということもあるでしょう。

そういう下地があったのですが、特にユニークなのは昭和53年、西暦でいいますと1978年のことですが、新潟市の近郊に亀田郷というのがあります。これは司馬遼太郎のライフワークとなった著作『街道をゆく』

にも、あそこにも北陸の部分で書かれているのです。どういう点で司馬遼太郎が注目したかといいますと、新潟というのは今、米どころになっているが、昔は、あそこは泥沼だった。腰や胸まで泥につかりながら苗を植えていったのです。その当時の農村の女性たちは出産の前の日までやったという想像だにできない映像があるのです。そこを美田に変えたのです。地域の人たちは一生懸命頑張ったのですが、そこにはやはり有力な指導者がいたのです。美田に変えた。そこに中国は注目したのです。小さな、小さな地域での苦闘の実験だったけれども、これをどこに応用したかという、まず1つは黒竜江省を中心にした三江平原というのがあるのです。実に大きな広大な平原です。その美田化というものに、北京政府も中国の東北部の関係者たちも関心を持ったのです。周恩来が佐野藤三郎という人物を呼んだのです。周恩来が「何とか技術を生かしてくれないか」と、あなた方の新潟の地域の苦闘の技術というものを生かしてほしいと呼ばれて、佐野という地域のリーダーがハルビンに出向いていったのです。

時間がありませんので具体的なエピソードは説明できませんが、そういうものがきっかけになって、新潟はいろいろな経験が生かせるのだということが、地元の人たちにもそこからわかってきた。当初は文化交流が中心でした。ところが御多分に漏れずといいたいでしょうか、ほかのところでもあるようですが、文化交流から経済技術交流へと、特にこちらからのノウハウの支援というものが、中国の要望によって、積極的に進められるようになってきているということです。ハルビンとの場合、地域おこしに対して仕掛け人がいたのです。それから新潟が経験してきた農業技術、こういうものが国際交流に生かされることになったのです。最近、新潟第二水俣病と言われるそうした公害時代の経験、環境問題で日中との間で交流が深まっています。

もう1つあります。これは日本海の対岸ロシアのウラジオストックとの提携です。しかも提携がなされたのはウラジオストックが開放される前です。これは港と港というご縁があったと思います。未開放しかも国際政治、北東アジア地域の中で久しくベールに包まれていたウラジオストックから新潟地震の当時、ハバロフスクから同じように建築用の木材が復興のために

送られてきたという背景があります。新潟港に入るロシア船、西舞鶴に入る船もそうでしょうが、大体今もあると思いますが、ウラジオストックの船舶公団の所有のフェスコ(FESCO)というのが多くなっていると思います。そういうところでウラジオストックともハバロフスクとあわせて友好、姉妹提携を結ぼうということで、今ウラジオストックとの間でも交流があり、そして空路便もできています。そういったことの努力が奏功し、新潟にはロシア領事館がありまして、あわせて大韓民国との領事館、それから今、新潟市長も尽力中ですが、何とか中国の領事館も新潟に設けたいという積極的な関係が出来上がっています。

もう1つ新潟の特性としては環日本海交流ということです。新潟は米中ソ、今日のロシア以外に韓国、北朝鮮との交流もあるというのはみなさんご存じですか。その前身をいうならば、北朝鮮の帰国事業があります。新潟がいち早く手を挙げたというよりも、ほかのやらなかったことによるものです。関係者によれば山口県の下関とかいろいろな港が挙げたそうですが、そこは「いろいろ問題があるのでやりたくない」ということでした。そこで新潟の当時の市長さんが「ではうちでやろうか」と。これは戦前、戦中の朝鮮半島と新潟との不幸な歴史的な関係、そのしょく罪意識というものがたぶんにあったかもしれません。しかもこの市長さんというのは、当時は自民党員で、こちこちの保守主義者で、しかも全国市長会の会長だと言われた人なのです。渡辺浩太郎さんというのですが、彼が勇断をふるって交流を進め陣頭指揮をとった。今は祖国訪問の船が新潟と北朝鮮の元山との間を往来しています。

ただ今はいろいろな問題がありまして、拉致事件とか、問題の発生源が両方とも新潟ですから、交流の進展化については賛否両論あるようです。要するに環日本海に向けてバランスよく交流をしていたということが重要です。この時代に、あの国際政治の厳しい現状の中で、米ソ中、南北朝鮮と単なる一地方都市がバランス外交をとったというのは、ほかの自治体にはたぶんない。国ではもちろんできなかったことでしょう。そんなことが、新潟の国際交流の自信につながっているように思います。今日は冷戦が終わりました。21世紀に向けまして新しい時代に入ってきています。幸いにも新潟が環日本海の拠点と現在、言われていま

すが、やはり新潟が、かつてから地道にやってきた、まずは単線の交流、それぞれの線と線を結んだ交流です。それが次に複線化し、それぞれの地域間国際交流を始めて線から面に進めていった。それが始まって、自治体を中心にした環日本海交流ビジョンが今日、活発に進められているということです。

もう1つ挙げたいのは市民どうしの交流です。国際交流の担い手は市民である。さて、皆さんの自治体はどんなものに使ったでしょうか。あの故郷創世基金の1億円が全国にばらまかれたでしょう。新潟の場合は、新潟市国際交流協会の設立にそれを全部組み入れたのです。もちろん1億円では全然足りなかった。どこの自治体でしょうか、金の延べ棒を作ってそれを1億円で地域おこしをやった。これはあまり地域おこしの事例にならなかったと思います。それとは違いそういう味なことを新潟は実行したのです。時間のあるかぎり事例を説明したいのですが、例えば、新潟市では新潟市民国際映画祭という文化行事を毎年やっています。新潟はそろそろ環日本海交流が進んできた。しかしどうも、先方のなまの姿が実際にはよくわからないと、いったい対岸の皆さんは何を考えているのだろうか、生活はどうなのだろうか。映画を通じてロシアの映画、中国の映画、南北朝鮮の映画、それからアジア各地の映画ということで、毎年2月に開いています。完全に市民が中心になって、新潟市はお手伝いをするだけです。市挙げてのボランティア方式で行っています。

そこでの大変興味深いアイデアですが、これを2月にやる。なぜかわかりますか。大体こちら2月というところだと思います。やはり日本海側の雪国というのは、冬場になるとあまり人の動きがなくなってしまう。夏にやるとなるとだれも来ないのです。市民は夏になるといろいろなところに出かけるからなのです。ところが2月ぐらいにやると、地元の人たちが見に来てくれる。学生もちょうど試験が終わると、事実それで観客動員という点において大変成功しているのです。今では毎年の行事となり、冬の風物詩になりました。先方からも監督を呼んだりしながら、なかなか東京や大阪で見られないような作品を新潟だけで見せるのです。新潟だけで見せるということにその人たちの思いがあって、だから見せてほしいと東京から来るのです。マニアが秋田や北海道、そして東京からも

来るのです。そういうことを今、例えば続けています。

あといろいろな事例がありまして、皆さんと同じようにホームステイあり、留学生がいるならば奨学金を与える。地元の人たちがいろいろと困っているのならば、外国人の相談、ケアを積極的に行う。新潟で行っていることの一つに、いろいろな案内、あるいは地図を作ったりするときに、英語、ロシア語、中国語、韓国語等々でも作っているというのがあります。

ここまでは大体皆さんもやっています。ところが次に違うところは、一部京都市、あるいはこちらの自治体でもやっているかもしれませんが、これからワークショップがあります。そうするとまた出てくるのは、まず地元で暮らしている外国人の人たちは、どういう情報が得たいかということですが、率直に言って名所旧跡の地図ではないのです。観光地図ではないのです。これはある程度PRになります、地元の人たちが知りたいというのは、どこのお店に行けばより安く買い物ができるのか。あるいは中国の方だったら、あそこに中国の食材があるとか、むしろそういう身近な生活情報がほしいわけです。案外こういう情報というのは行政の人たちでは思いつかないのです。向こうの人たちが来たら、何かPRしなければいけないと、そうするとそうした神社仏閣であるとか、そういうところのマップを作りがちです。外国人の人たちはそうではないのです。むしろそういう日常の身近な生活の情報がほしいわけです。そういうことで例えばゴミの出し方とか、そうした生活するうえでのいろいろな情報を冊子にしたり、地図にしたりして地域情報を積極的に提供すること、新潟は今それに取り組んでいる最中です。

もっとお話ししたいことがあるのですが、概略を新潟についてお話ししました。新潟について、まだまだいろいろな問題点も新潟なりにあります。これもまた機会をあらためてお話しします。

さて、そろそろそれを受けて京都北部地域の国際化に話を移したいと思います。京都府から本当にていねい且つ、大量な資料をいただきました。私は皆さんへの期待を込めてお話をしたいことなのですが、いろいろな資料を見ながら、京都北部地域、そして北近畿地域というのはずいぶん重要な地域なのだとあらためて思いました。私は昔から地理が好きでして、例えば新潟は北陸ですが、現在では東京などとのつながりが

とみに深まってきている。提供していただいた資料からすれば、この北近畿というのは関西圏、大阪とか京都とのつながりがある。それからもう一つは中国地方、山陰です。それから北陸とも密接なつながりをもっている。もう一度海を見直そうという文明論、つまり海洋史観が、例えば京都にある国際日本文化研究センターの研究者の何人かが、そういう発想にあるのです。その代表が川勝平太氏でしょう。もう一度海の時代が戻るということであれば、海は道であるということ、そしてこの地にも日本海対岸があるので。皆様方が作成されている資料にもこれは書いてあります。

問題はどこにあるのか。最近山陰も、北陸もそろそろ少なくともハード、インフラの整備等いろいろ進んでいるようです。この北近畿もそれなりに進んでいるようです。現状では私も京都市から来たのですが、こちらに来る場合に敦賀から京都へいったん出ます。あるいは山陰に行く場合に北近畿地方が素通りなのです。そんな現状があるのが北近畿地域なのです。本当は舞鶴を中心に日本海沿岸が繋がらないと、本当の意味での国土軸、太平洋ベルト地帯第一国土軸と、日本海国土軸第二国土軸が完結しないのです。最後に残されたのがこの地域とってよいでしょう。皆様方の地域なのです。どういうふうに知恵を絞って、この不自然な交通ネットワークを(京都市の人には悪いのですが)改善し連結させていくのか、あるいはここでどういった地域おこしを行うのか。あるいは地域おこしをその国際交流とどのように絡めたかたちで行っていくのかということが、皆さんのこれから最大の課題だと思えます。

いろいろな素材があります。自然があります。歴史的に言えば、かつて西回り航路、つまり北前船のルートであった。新潟もそうですが、今はやはり船の時代、ある意味では北前船のシーレーンの時代から日本の近代に入ると鉄道の時代になりました。これで決定的に日本海側と太平洋側の格差が出来上がったのです。裏日本と呼ばれたのはそれ以後です。私の親しい新潟大学の古厩忠夫先生が「裏日本」という本を書かれましたがこのことを分析している。そして現代に入ると、自動車道、道路の時代になってきた。そこでこの地域が、何となく今抱えているような過疎の問題、高齢化の問題、社会発展の問題等々で、京都市と完全な

格差が出来上がってしまいました。

でも格差は格差として、何か皆さんがこれから賢明に自分の地域というものを見直しながら、何か国際交流に有力な素材はないものかと考えます。人もいるでしょう。あるいは何か歴史的な経験があるでしょう。ないならばないで、これから作っていくことを考えても良い。そういったかたちでこれから私のつたない講演を受けて、皆さんと一緒に私自身も入って考えていきたいと思います。北近畿地域に有力な素材を新潟市という都市ではなくて、違った地域での具体的な事例を合計4つほど、もう一度時間をあらためてご紹介して差し上げようと思っています。ぜひ北近畿、京都北部地域の国際化を皆さんやってください。私も応援したいと思います。そして私の話にあったように、大いに私は期待したいと思っています。

さてこれからは少し身近な、具体的な事例をいくつかご紹介したいと思っています。国際交流事例その1、主に舞鶴市、綾部市、福知山の皆さんお聞きください。これはまず上越市の事例です。皆さん上越市をご存じですか。新潟は随分広い県面積を有しておりまして、新潟市と上越市とはかなりの遠隔距離に位置しています。山形の人は大阪に来るのに、日本海縦貫線を使いますと、3分の1以上が新潟の通過時間に割られるとぼします。それくらい新潟は細長いのです。県都新潟市と上越市は相当離れた地理的位置にあるのです。これがヒントです。上越市の行政区は新潟県ですから、新潟県庁、新潟市にはかなり遠いのです。何かにつけてこの距離を自覚せざるおえないのが上越市です。新潟市を中心に、県庁所在地を中心に考えるならば、センターに対して周辺に常におかれてしまっている。そこで発想の転換を図ったのです。上越市はこのままではいけない。

上越市は小和田雅子さん一族の故郷で、ゆかりの地でもあります。それからキーワードは港、環日本海、それから地域間交流です。これも日本の国内、それから海外との関連を含めて話を進めたいと思いますが、今は上越市になっていますが、昭和40年代に高田市と直江津市が合併したのです。高田市というのは当時人口7万、それから直江津市が4万、高田市というのは城下町であって、戦前からあるのですが、現在でも高田陸上自衛隊の駐屯地があるのです。ある意味では自衛隊とかかわりのある町です。直江津市は直江津港が

あって、そして鉄道の町です。信越線と北陸線の交差点にあるわけです。

先程の話に戻りますが、上越は常に新潟市や県庁を見ていたのでは周辺部に置かれたままだと、発想を転換しないといけないというのが地元の若者たちから出てきました。どういう転換かといいますと、これは一つの事例ですが、上越市の人が特に重病になったときに、どこの病院に行くか皆さんわかりますか。通常新潟県単位で考えるならば、最高医療施設の完備する新潟大学の医学部付属病院のほうです。すごく遠いのです。高速道路で2時間かかります。もっと近いところはあるのです。信州大学の医学部も遠いのです。松本市にあるので長野市ではない。残されているのはわかりますか。富山市です。富山医科薬科大学に行くのです。したがってその話にもあるとおり、特に上越地区のJC青年会議所を中心にして考えたのは、上越は国内のどこネットワークを組むのが自然か。まず、従来からあった新潟市等々、こちらの方面です。もう1つは富山、もう1つは長野です。そのいわゆるT軸というのですか、上越市はこの結節点なんだと。ここで上越というのは港を中心にして交流をしていったら、ほかのところにはない上越ならではの国内地域間ネットワークが出来上がると考えたのです。

もう1つエピソードがあります。ある大きな出来事はどの程度日本海沿岸で被害があったのでしょうか。昨年度に日本海のナホトカ号の重油流失事故がありました。私たちの身近に親しむ海岸に重油が流れてきたのです。ボランティアの人がずいぶんいらっしたでしょう。上越の沿岸も相当やられたのです。地元といっても上越を中心にして、もちろんそこで暮らしをたてている生活民が大挙して参加しました。あまり新潟市から来なかったのです。新潟市もやられましたから、そんな場合ではなかったのです。

さて、その上越市周辺部以外の人たちの中で、どこからやってきたのかおわかりですか。実は長野市からきたのです。つまり長野県は内陸ですから、長野県にとっての海、港は直江津港であり、上越の海岸なのです。インタビューで確か新聞に載っていましたが、「日本海この海岸というのは我々の海でもあるのだ」ということで、県境を越えて大挙してボランティアグループが応援に駆けつけたのです。これくらい信州、富山の結節点に上越市はあたるのです。

こういう国内の発想を受けて、時代は環日本海ということで今度は日本海の対岸を見たのです。環日本海交流の場合に先程の事例ですが、新潟市の先進事例があると、そこで我々二番せんじであってもしょうがないと、そしてどこどうアクセスしたのか。今度はこの発想と経験を外に持っていったのです。これが中国、韓国、場合によって最近ですがロシアにも手を伸ばして、上越の人に言わせると「環日本海トライアングル友好都市関係」というのを作ったのです。どこと結んだのかというと、一つは韓国の浦項市です。ちょうど日本海側の有名な工業都市です。浦項工科大学という高等教育研究機関もあります。韓国での環日本海研究の拠点になっているところです。ここと交流をまですいたしまして、友好都市関係を結びました。それからもう一つあるのです。これは中朝国境の中国側にある丹東という町です。ここと不定期に直江津港と交流があったのです。もう一つあるのは上越市の独自の自主的なトライアングルではないのですが、珥春市というところと友好都市提携を結びました。中国のこうしたいくつかの港と上越市がトライアングルで浦項とも組んだのです。最近ロシア極東の港町とも交流が深まってきているようです。

上越が始めたのは経済的な観点等々も合わせて、事例にしてください。つまり長野県が大豆の輸入をしたかったのです。そのときに上越は直江津港を使って、中国の珥春から例の図們江開発のルートを通して、北朝鮮の北部の港湾あるいはロシアのザルビノ港と組んで、最短で長野県内の大豆の供給に資するような発想を特に長野県の北部地域と、そして上越地方が手を組んで対岸に向けて、自主的な交流を始めていったのです。舞鶴市などですと、これはかなり事例になりませんか。後背地にいろいろなものを抱えていて、場合によっては先程話したように山陰や北陸や、それから大阪、京都市とのT字路関係が出来上がる。そこでの舞鶴は重要な結節点になるということです。そして更に日本海対岸へ。この話がまず一つ挙げられると思います。

もう一つは国際交流の事例その2です。三和町、夜久野町、それから大江町の事例に相当するかもしれませんが、ここは御多分に漏れず資料にもありましたが、過疎化、人口が減少しています。舞鶴は今年15人確が増えたそうですが、そのほかは全部人口減です。それ

から人口も類似しているということでご紹介したいのですが、これは新潟県ではないのです。青森県の車力村をご存じですか。よく地域の国際化の事例として、国際関係論で事例として挙げられるのです。津軽にあるのですが、人口は6000人で大体似ています。それよりもちょっと地元の3つの町は少ないのです。キーワードは国際技術協力、それから「村」と「ある国家」が結び付いたことです。国です。それからもう1つのキーワードはたぶん外国の方はご存じないと思いますが、「山背」というのです。なぜかといいますと、稲作の農業技術援助、この交流を自然の厳しいモンゴルという国を相手にやりました。

きっかけはこういう背景があるのです。冷戦が終わってから旧コメコンを離れ食糧自給にモンゴルは今大変苦しんでいる国の一つだと思います。それに対して人口約6000人の津軽の車力村が、小さな、小さな自治体ですが、この財政危機が叫ばれる中で村の予算の平均ですが、0.7%も支出して、村から専門家の派遣をモンゴルに対して行って、それからモンゴルの青年の研修も受け入れて、これは毎年行って今日に至っています。

先程のキーワード「山背」と言いました。これをご存じですか。津軽というのは関西の日本海側、北陸とも違って、もっともっと農業、あるいは米を作る条件の厳しいところです。「山背」という冷たい霧が気象の変化でときとして流れてくると、それによって昔は壊滅的な米の不作に陥るということが定期的にあったのです。もちろん地元も黙っていませんでした。できるだけ冷害といいますか、寒冷地としての厳しい環境を克服できるような優良品種を努力して作っていったのです。それにはやはり地元の並々ならぬ努力があったでしょう。そうした技術もノウハウもあったでしょう。モンゴルというのはご存じですか。やはり大変自然条件のある意味では厳しいところでもあるわけです。モンゴルから要請があって協力を行いました。この協力によって、実はモンゴルの歴史史上初めて米の収穫があったのです。車力村という人口6000の東北地方の過疎、人口流出、若者が出ていく、高齢化などで悩んでいるところがこれをやってのけたのです。若者の村からの流出という問題を抱えている全国の過疎の農村地帯、それから米の輸入自由化によって、農業というものが揺れている全国の農村に、大き

な影響を与えたと言われています。

なぜならば整理をしますが、東北地方の数ある1つの小さな村が大きなモンゴル全体の食糧自給に貢献したということです。こういう自信を村人に与えました。それからモンゴルとの農業青年との交流が深まってきた。何よりいろいろな交流がある中で、これからを担っていくのは子どもたちのはずですが、現在も明らかに過疎の町です。かつては国際交流なんて夢にも思わなかった。ところが最近こうした事例を受けて、車力村の子どもたちが、これはある文集に書いてあるのですが、「身近に国際交流ができる車力村に生まれて、私は誇りに思う」と、こういう文章が文集に取り上げられているのです。こうした交流によって村の生活を見直させたということ、こういった国際交流もあるのだということなのです。私の専門の観点からいえば、「国」と村単位の「地方自治体」が結び付いたということで、従来の外交のパターンを転換させるような一つの事例がここにあったということです。この点を多くの研究者も指摘しています。

国際交流の事例その3です。これは若干国際交流パロディー編です。なぜかといいますと、先程大江町の方からお話がありました。「鬼伝説があるのだ」と、新潟にもやはり酒吞童子、鬼伝説があるのです。これはまだ仮説の段階ですが、ひょっとして大陸からの漂流民ではないかということから、何か対岸とつながりがあるかもしれないということがあるのです。これはおいておくとして、キーワードは鬼伝説です。ただ事前の資料では、先程のご説明のように「世界鬼学会」があることを初めて知りました。それからあわせて立命館大学の林堅太郎先生が「鬼学会」の会員であることも初めて知りました。この国際シンポジウムにはかわらなかつたのですが、ある自治体が行っている「火の玉」で地域おこしをするということです。それは「狐の送り火」です。大体似たようなものです。つまりどこの町かという、新潟県の津川町というところがあります。ちょうど福島と新潟の中間で、現在は新潟県に入ります。明治までここは会津藩領でしたが、明治に入ってから新潟の行政区になりました。彼らが言うにはちょうど日本の「アルザスロレーヌ」だと、いわゆる専門用語で言いますと「両義地域」(マジナルリージョン)なのです。両方の行政区の経験を歴史的に経験していて、両方の文化がちょうど交わっている

ところなのです。そのちょうど中間地点にある町です。この町長さんは、日本道路公団北陸ハイウェイ審議会の(私も現在、委員なのですが)、委員の1人です。町長さんがいつもは喜びを着てくるのです。大変元気な方で、いわば津川町のセールスマンなのです。「それにおれは徹するのだ」ということでした。

この津川町というのが狐火伝説で有名なところなのです。毎年5月に狐の嫁入り行列というのがあります。これはよくNHKの全国版でも放映されていて、皆さんご存じではないかもしれませんが、そろそろ全国区になっています。全国的に知られるようになってきたということです。全国的に知られるようになってきたのは、その狐火伝説の町、津川町が、これを国際交流のきっかけに利用したのです。今申し上げましたように、狐火伝説の里なのですが、いわば狐火とは火の玉なのです。これは自然現象です。これをキーワードにして国際交流の舞台に一躍躍り出たということです。

つまり、これから話すような経験によって、非常に自然のすばらしいところですが、地元の歴史とか、文化とか、環境というものを十分に生かしてきた。明治11年にイギリスの旅行作家でありますイザベラ・バード、彼女が東北地方を回って、そして阿賀野川という川で、これは日本海に向かって流れているのですが、その川沿いをずっと旅行して日本を回って朝鮮半島に行ったのです。彼女はその著書「日本実地紀行」の中で「ライン川に勝る景色である」と絶賛しているのです。そういったいわば風光明媚なところなのです。これからのシーズン、京都や北近畿に負けないくらい紅葉のすばらしいところでもあります。

そういった世界でも証明されている景勝の地、この狐の送り火なのですが、狐の嫁入り行列だけではなくて、ある大きな国際シンポジウムをやりました。鬼伝説の場合どの程度おやりになったのでしょうか。第5回目だったそうですが、『狐火の里』という専門誌があるそうです。この関連である方が、狐の嫁入り行列を取材にきたのです。だれかという、火の玉博士と言われていた大槻義彦教授、これは早稲田大学の理工学部の先生で例の超常現象で論陣をはられている方です。この方が取材にやってきた。これが縁になったのです。

町長さん、あるいは地元の火の玉狐の嫁入り実行委

員会がその先生から聞いたのです。「国際火の玉学会」が世界にあるということ、これは純然たる学術的な自然現象を研究する国際団体なのだそうです。そして、津川町でこれをやりたいということになったのです。周りを見ても英語を話せる人がどれだけいるのかわからないし、もちろん国際的なイベントの経験は皆無。国内で嫁入りの経験はありますが、海外での嫁入りの経験はないのです。それでこれをやったのです。

2年前の平成8年「第5回国際火の玉シンポジウム」をみごと、過疎の津川町で開催したのです。アメリカ、オランダ、ベルギー、イギリス、ドイツ、オーストリア、ニュージーランド、ロシアそれから日本の合計9か国から専門家が大量して参集しました。津川町の歴史始まって以来の数だったでしょう。そして受け入れてみごとにやってのけたのです。ここで言えることは、その土地にまつわる一つのレジェンド、伝説というものを貴重な素材にしたということ。狐火伝説の町、津川町というものを世界に情報発信したのです。こういうことがまずあると思います。

それからもう1つは小さな過疎の田舎町でも、その町民が経験してきた生き様を世界に披露したということ。これで大変、津川町は自信がついたのです。市民も動員した。温かいもてなしの町民性というものも生かしたと言われています。それから通訳はどうした、いない。あるのです。ここでいうならば立命館大学があります。津川町では早稲田大学を動員したのです。津川町が大槻さんを中心にして、大学院生とか英語のできる人たちを使って、そしてみごと連携プレーでやったのです。これを今後も何らかのかたちでつなげていくそうです。

次は国際交流の事例その4です。時間からいってこれが最後になると思います。これはご当地でいえば、綾部市にとっても参考になるでしょう。綾部市には確か世界連邦運動の全国での初めての町だそうです。今どのような活動が行われているのでしょうか。実はちょっと話してしまいませんか。もう亡くなられたのですが、ここの事例を日本で有名な国際政治学者が取り上げたのです。地方の国際化、国際平和の事例として、かつて大阪大学にいらっしゃった馬場伸也先生が論文により、紹介されています。私にとってもいろいろ理論的な影響を受けた先生ですが、その方がこの綾部市を確かに論文化し、取り上げているはずで

す。綾部市の方ご存じでしたか。説明はそのくらいにしておきたいのですが、それから三和町とか、あるいは夜久野町、大江町の事例になるかもしれません。

新潟県や日本海側でなくていいよという大森先生からご意向がありました。こんなところがあるのかというので、学会等何も関係なく、そのために訪れた。それは九州の町です。長崎県西指宿半島に外海町というのがあるのです。やはり同じような過疎の漁村です。五島列島の五島灘に面しているところなのです。これはどこと交流をしたのかということ、どういうエピソードがあったのか。フランスとのいわば心の温まるような、すばらしい交流があるのです。これご存じですか。外海町は外の海と書きます。文字どおりこの地形からきているのでしょうか。外海町(そとめちょう)というのです。

国際交流を通じて過疎の町のいわばヒューマニズムという問題なのです。こんな交流があってもいいじゃないですか。日本の中にこんな交流があるのだなという事例です。背景から説明しますと、まず先程申し上げましたような、長い間外海町というのは陸の孤島だったのです。日本海側にかつてはずいぶんありました。新潟県でも三方が海に囲まれていて、かつてですが、船でなければ外界に出られなかったという町、村というのは、新潟県内の海岸部の町、村にずいぶんあるのです。今はもちろんそういう状況は解消されていますが、その外海町ですが、急斜面が前面に出ている町です。急こう配の山が海に迫っている。それから当然農耕地にも恵まれなかった。だから住民は江戸時代から飢えに苦しんでいたのです。ここはこういう状況も手伝ってのことでしょうが、あの有名なキリシタンの里でもあるのです。大体今九州にクリスチャンが10万人ほどいるそうです。その町の一つです。

ここに、明治12年(西暦1879年)、1人のフランス人の宣教師が赴任したのです。マルコ・ドゥ・ロー神父と言います。やはり昔からこういう状況の中で飢えに苦しんでいた現場をまのあたりにしたのです。そうした住民の窮状、地域のさんたんたる状況を見て、いろいろなことを実践したのです。それは授産場の建設、それからフランスから来たものですから、特に出身地がノルマンディー地方で、マカロニとかそうめんの製造法を地元伝えて、そして荒地にも適するような小麦等々の優良品種というものをフランスから

持ってきたのです。道路改修も行いました。フランスから農機具も取り寄せたのだそうです。そうしたいろいろな農業の改良を賢明に布教に合わせて指導したのです。荒地の開墾、道路改修、孤児院も作った。それから医療保険、つまり診療所も作った等々のことをやったのです。

つまり福祉関係で地域振興に貢献したということです。この方はノルマンディーの貴族の血を引いている神父さんです。結局人々の生活というものを何とか向上させるために自分のお金をつぎ込んだのです。今のお金にして、地元でいろいろ見聞してきたのですが、3億円だそうです。これはなかなかできません。では皆さんができるかという、そんなことはないのです。それで33年間外海町に住んで、そしてフランス、ノルマンディーの故郷に帰らないで、そこで亡くなったのだそうです。

10年前くらいに私は訪れたのですが、外海町というのはクリスチャン、主にカトリックの人たちが多いのです。クリスチャンばかりではなくて町の人々は、今大体100年以上たって今日もその神父さんを恩人として仰いでいます。地元ではドウ・ロー様と呼んでいるのです。私は町長さんにはお会いできなかったのですが、町長さんの言葉が展示館に書いてあるのです。そこを見るとこういう言葉が書いてあるのです。「もので栄え、心で滅ぶ、今そんな社会になっているのではないのでしょうか。この地に生きた先人の遺産というものを、神父の人を愛する崇高な精神を子孫に伝えていかなければなりません」ということで、そこで外海町は文化遺産の掘り起こしを行ったのです。

こうしたことに力を入れて、何とか自信をつけよう。そればかりではなくて、フランスのドウ・ロー神父の出身地、ノルマンディー地方にウオスロールという村があるのですが、そこ昭和53年、1978年に姉妹都市提携を行ったのです。キーワードはその当時は援助を受けた立場で逆だったのですが、つまり国際協力です。国際技術協力です。フランスから日本に渡り、ある意味では人道的な観点の国際平和ということ、国際福祉の問題です。今その外海町にはドウ・ロー神父記念館というのがあるのです。それからあわせて子ども博物館というのがある。その町を文化村にして、やはり長崎にはオランダ村があるけれども、あそこばかりではなくてハウステンボスもいいのですが、こちら

の方にも観光という観点で人々が訪れているのだそうです。ここでのまとめは、相手を知るとともに自分の住む地域をよく見つめて、草の根の相互理解を深めることが、経済的にはあまり結び付かないかもしれないけれども、かつての遺産、経験、交流から何か自信をつけて、外海町を見直していくということなのです。子どもたちに与える影響はものすごく大きいように思います。これを何とか事例にして、この北近畿の自治体できませんでしょうか。こういう事例が実はあるのです。

これからワークショップに入りますが、地域に根ざすというのが、地域だけを見ていることではなくて、その地域から全国、あるいは国際社会、世界というものを見つめること。そういった地域から実践情報を発信することだと思います。それからまちづくりとか、まちおこしというのは単なる経済行為ではないと、つまり住民がいろいろな問題、課題そうしたものを主体的にとらえて、そして社会的背景とか、歴史的な認識というものの中から課題の解決、それから自己の変革、これは地域そのものの変革もあるでしょう。地域住民と呼び換えてもいいのですが、生活というものを何とか変えていく。こうしたものを通じて住民のネットワークが出来上がる。住民もそれぞれの地域ばかりではなくて、地域と地域が場合によって国際ネットワークで広域的に結び付くということです。

こういった観点から自信を持つような、例え過疎があっても、例え高齢化があっても、りっぱな自信にあふれた町に作り替えていくこと、これをしかも国際的に見ていること、これがやはり大切なように私には思えてなりません。これは大森先生とも車の中で、そして電車の中で話をずっとかわしあってきました。私もいろいろな地域を回って、なぜ国際政治学者が地域おこしをやるのかというのがありますが、いろいろなところに行きますと、過疎の町での生き生きしている町、村というのがあります。目が輝いているのです。特にどの住民層を見るのか。つまり子どもたちの目の輝き、あるいは高齢者の目の輝き、そして生き生きとした姿というのは、それはあまり人口とか、過疎とは必ずしも関係ないのです。必然性はなにもありません。どんなに人口が集積していて一見華やいでいる市でも、都会でも死んでいる町というのはあります。だからその辺をもっと柔軟に考えて、その地域、過疎、あ

るいは高齢化の問題があるならば、それを逆手に取って、何かいろいろな知恵を絞ってできないかなと思います。

それで最後にご紹介したいのが、これはどうも京都府でまとめられたものではありませんが、新潟から1冊だけ持ってきました。皆さんそこに問い合わせるとわけてくれると思います。2日前に入手したのですが、新潟県国際交流協会が作った「国際交流先進事例集」というのがあります。これは新潟県内のいろいろなイベント、いろいろな交流、様々ありますが、この経験というものをまとめて新潟の県内の各所に配るのです。私もかかわっています地元の国際NGOである新潟国際ボランティアセンターの経験、バザー、それからモンゴル草原の詩と風を描く新潟国際文化交流センター（新潟モンゴル親善協会）の定例、環日本海駅伝競技大会通訳、外交人のための無料検診、羽ばたけ21未来の子どもたちへ、日本語教室、日本語スピーチコンテスト、米国ウィスコンシン州シェボイガン市との姉妹都市交流の燕市の事例、国際火の玉シンポジウム、以上9つあるのですが、これを詳細に書いてあるのです。団体の報告書にあるような内容と違いまして、予算はいくらか、あるいは展示をどのように工夫したのか、PRをどういうふうにしたのかなどの実践の知恵がぎっしり書いてあります。エピソードもあるし、おもしろい事例もあります。目をひくのは失敗例ですが、今後これを読んだ人が同じような経験をしないうにということで、すべて書かれています。これはいわばマニュアルです。これを新潟県庁の人が2日前にくれまして、「これを京都でもちょっと紹介してください」ということで持ってまいりました。もし関心がおありの方はこれを見てください。本当に細かく書かれています。これさえあれば、あなた方もできるという国際交流事例集なのです。全国に先駆けて新潟県が作った。京都府には残念ながらまだないようです。こういうものを京都府、あるいはこちらの北近畿になれば北近畿で作ったらいいと思います。それこそが相互の知恵の交換なのです。これをこれからやってください。今情報化の時代、知恵の経験の時代でもあるといわれているのです。以上時間がちょっと超過してしまいましたが、国際交流事例、4つの事例をこちらで報告しましたが、ご清聴ありがとうございました。